

自分の命が危険にさらされる中、防災対策室に残り続けた遠藤さんのことを知り、その決断をするという「生き方」のすごさを感じつつ、多くの疑問も浮かんできました。「仕事への責務」と「自分の命」を比べると、まずは、「命を優先」してしまおうと思います。なぜなら、そこに居続けることによって、遠藤さん自身の命が奪われてしまうことになりかねないからです。遠藤さん自身のご家族や大切な人を悲しませることになります。(防災対策室に残るということは、)僕には、思いもつかないような決断です。だからこそ、衝撃的でした。次回の ZOOM では、その当時の遠藤さんの思いなどを聞いてみたいと思います。

最後に、気仙沼の避難所で行われた卒業式の答辞の映像を見ました。



<答辞の一部>

自然の猛威の前には
人間の力はあまりにも無力で
わたくし達から大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには おごすぎるものでした。つらくて、悔しくて たまりません。
命の重さを知るには大きすぎる代償でした。
しかし、苦境にあっても 天を恨まず、運命に耐え
助け合って生きていく事がこれからのわたくし達の
使命です。

卒業式まで19日と迫った教室の中では、映像を見ながら涙をこらえている生徒もいました。事前学習を終えて、山本明依さんは、「“愛のともしび”の事前学習を終えて、19日後に行われる私たちの卒業式のことを考えていました。もうすぐ、9年間共に過ごしてきた仲間との別れが来ます。しかし、東日本大震災の当時、私たちとは違う心境で、“卒業”を迎えた中学生がいたことを知りました。とても悲しい気持ちになりました。私は、改めて、この仲間のことを大切だと感じました。この仲間と過ごせた時間が、『当たり前』だと思っていた日常が、『かけがえのないもの』であったことに気付かされました。」と学習を振り返りました。